

出郷・苦学……一九四六年〜五〇年

わが家の貧しきいわれをわれは知らず はげしく生きん生きてみるべし

東京の外語学校の合格証 父に示せど答え給わず

(担任の英語教師は法学部進学を勧めたが、東京外語中国語学科のみを受験、合格)

わが父の木箱より大銭ぬき去りて 夜も白々の駅へと走る

朝ぼらけなつかしの筑波遠去りて 苦学の途にわれいま就かん

鈴なりの常磐列車に乗りこめば まなかいの乙女苦しみてあり

学び舎は仮住まいなり井草なる 麦畑のなか小学校のごとし

(空襲で焼失した東京外語は練馬区上井草の仮校舎で授業した)

これがこれ語学教育なるか『急就篇』食らうがごとく暗誦させたり

(『急就篇』は中国語入門テキスト)

雨降れば外人教師と四人なり 第二外語のロシア語の午後

(ロシア人教師は捲舌音指導のため、わが口中に指を入れようとした)

日本語を禁じ合いたるかの友と われはしだいに遠ざかりおり

(在学中、中野区上高田の日新学寮で生活した)

食堂に半刻も並びてありつけし 芋雑炊のいと軽き碗

米藪を背負いきてわずかに届くれば 苦しく笑みてありわが老教授

(寮の舎監だったポルトガル語の田先生は無理して入寮させてくれた)

マントかむり酷寒に並びて手に入れし この書(ふみ)いたく尊かりけり

学寮の二十畳間に友ら坐して 床板はぎて暖を採りおり

学寮に復員学徒らたむろして われらを使役せり心地よきげに

(軍服を着た復員学徒らが幅を利かせていた)

わずかなるキセルをせるにわが頬を 二度打ちし駅員は復員兵なりき

かくしげく語学学ぶは何の謂(いい)ぞ 半歳にしてはや望み失せたり

(引揚者、旧軍人たちが飛行場跡地を開拓した「筑波自由農場」に友人を訪ね、そのまま入植)

学に倦み筑波嶺(ね)の麓(もとえ)のこの大地 入植せしは敗北なるか

食糧(もの) つくる質実の暮らしにあくがれて 入植せしもここも人の世

飛行場の跡に播きたる麦枯れて 野兔捕りて食わんとすわれら

三人の子らを残してみまかりし 入植者の亡き骸荷車にひく

農場の果てなる闇にあかあかと 葬(はふ)り火たちて子らは哭き伏す

闇に立つ友らの姿あかあかと 入植者の葬り火小夜嵐吹く

旧軍派と引揚派のいさかいしめり帯び われ農場の暮らしに倦めり

(台北帝大農学部出の人が強く復学を勧めた。八カ月ぶりに復学し、学寮に戻る)

学び舎に戻りてみれば共産党の プロパガンダの意外にはげし

いづくよりか『人民日報』持ちきたり われに読ませしかの中退の友

鳥打帽ふかくかむりて革命の とき来たれりと説くかの中退の友

党に入りし友らがなべて確信に 満つるさまみてわが心憂し

決意して入党申込書に筆執れば ハラショーと叫ぶロシア語の友

（「ハラショー」は「いいぞ！」の意味）

駅頭にアカハタ売れば初客は 赤子背負いし朝鮮人なりき（東中野駅にて）

米兵の車洗いし一週間 屈辱に耐えたり学資乏しければ（原宿にて）

音楽もせりふもすべて覚えたり フィルム運び三日をやれば（金杉橋附近の映画館にて）

思想問う鉄工所の主に黙しつつ 家庭教師を辞して帰れり（赤羽駅附近）

登校の途中にレンゲ咲くをみて 花に臥したり故郷恋いつつ

内鍵とカーテン閉めし査問官 初体験にわれはおののく

（党批判文書を配り反党分子として査問を受ける。拷問はなかったが、党にふかく失望）